

母の 644 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

こどものメイゲン① 2

わたしが読んだ童心社の本⑩／岩間建亜 3

絵本を真ん中に——人が結ばれるとき／村中李衣、徳永満理、金澤和子 4

川端英子さん「野間読書推進賞」受賞記念インタビュー 7

イラスト／西巻茅子



「お正月さん、こんにちは」

田畑精一

今年もお正月がやってきました。

「お正月さん、こんにちは」と一人つぶやいていたら、驚いたことに遠い子どもの日の記憶が、まるで昨日のこのようにくっきりと浮かびあがってきたのです。それは八十年も昔のお正月、元日の朝の场景でした。

東の窓を背にして一番の上座に祖母が、続いて父と母が向かいあって座ります。三人ともとおきの晴れ着姿です。そしてその手前に五人の子どもたち。みんな一張羅ではり切っています。こうして元旦のお祝いが始まるのです。「旧年中はいろいろとお世話になりました。本年もどうぞよろしく」。お屠蘇といっしょにお祝いの言葉が廻ります。

正座している家族一人ひとりの前に、ちゃんとその人専用の祝い膳があります。面白いことに男膳と女膳は全く違って、男膳は朱塗り一色の低いお膳ですが、女膳は外が黒、内側が朱色で脚のとても高いお膳なのです。いつも忙しく家事を支えている女性を、お正月だけはお休みにする風習がぼくの家にもありましたが、女膳のたたずまいもそれを表しているようでした。

さてぼくは、その朱塗りのお膳でいただくお正月のご馳走が、ほんとに好きでした。白味噌のお雑煮、ごまめ、黒まめ、数の子、たたきごぼう、そして、あちゃら漬。二日目のお雑煮だけはおすましに変わったけれど、あとは三日間同じもの。でもこの素朴さこそがお正月にふさわしかったのです。あの素晴らしさは、余程の料理の達人が知恵をしぼって生みだしたに違いない、味わった人たちが絶賛して町中に広まったに違いないのです。

でもその素晴らしかったお正月が、姿を消しました。戦争がどんどん激しくなって、食べるものがなんにもなくなってしまったのです。大勢の人が死にました。父のいのちも奪われてしまいました。そしてお正月といっしょに、ぼくのあの朱塗りのお膳も姿を消しました……。

いえいえ、たしかに今年もお正月はきてくれました。でも朱塗りのお膳といっしょに、お正月の魂と呼びたいものがなくなってしまったと、ぼくには思えてなりません。「お正月さん、どこいった、どこいった」、お正月さんを探す旅に出かけたいと、ぼくは今真剣に思っているのです。

(たばた せいいち／絵本作家)



こどものメイケン 1

■積み木を積みあげながら

「ぼくのおうち」

— すごいね。大きいおうちだね。

「ここ、ピンポーンておすところ」

— そっか。ここなんだね。りんたくんのお部屋は何階？

「3かい」

— りんたくんはどこにいるのかな？

「ここ」（自分を指して）

はっとする子どもの一言を、シチュエーションを添えて、お寄せください。氏名・住所・電話番号・お子さんのお名前と年齢・お子さんのお名前の掲載の可否を明記のうえ、童心の会（p8）まで。掲載させていただいた方には絵本を1冊プレゼントいたします。

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本 10

「だじゃれ」

精神が

光る絵本

岩間建亜

いわま たけつぐ／クレヨンハウ
ス副社長、子どもの文化普及協会
取締役。雑誌『月刊クローン』や
『月刊子ども論』の編集長を歴任し、
多くの絵本の編集や子ども向け楽
曲の制作・出版に携わる。



中川ひろたか／文 村上康成／絵

中川ひろたかさん。このころ、ちょっとお会いしていませんね。お元気ですか。三十年くらい前は、昼と無く夜と無く、毎日お会いしていたんじゃないかなあ。酒と音楽の日々、がなつかしい。

さて、『おまのたまご』について。

あの鮮やかな絵本デビューを忘れていません。黄色い表紙にウイंकするさつまいも、そして「さつまいものおいも」という筆文字の赤いレタリングが鮮烈だった。中川ひろたかさんというと、この表紙がすぐ思い浮かぶほど印象が強い。

「小学校五年生のときに、だじゃれで食べていきたくて思った」と何度か聞いていたから、これはオナラの絵本だ！と直感したほどだ。さつまいもだし、黄色いし。

ところがなかなかオナラにならない。土の中で暮らす、さつまいも一家が筋トレしている話だ。品がいいのは、村上康成さんの絵のせいで、中川さんのせいではないだろう。もっとコレコレのだじゃれがきつい、笑うまでだじゃれこいたる！みたいなあの中川ひろたかさんじゃない。

とはいえ、のどかな展開に、じゅうぶんにサービスピ精神が盛り込まれている感じがある。エンターテインナー中川さんの指南か、村上さんの絵におかしみがずっと漂っている。さつまいも一家の食事をしたあとの歯磨き、便秘模様のトイレや艶っぽい母子のお風呂姿、トレーニング姿やみんなの見る夢……。

ところが畑に子どもたちがやってきた。このシーンがいい！ うろこ雲やホバーリングするトリ（村

上さん真骨頂！）にうっとりする。さつまいも一家と子どもたちのつながりははじまる（だから筋トレしてたんだよ）。

スッポーン！「わたしたちのまけでこわす」負けたくせに居直るさつまいも一家。「ほうさくたほうさくた」「ほうねんまんさくた」焚き火をして焼きいも大会。「ほくほくおいしい」「あまくておいしい」「いっぱいいっぱい食べました」から（できました！オナラ！やっぱり！）「そしたらプーツ あっちでプーツ こっちでプーツ」「くさーい」「くさーい」さつまいもの大将！「はっはっはっ わたしたちのかちでこわす」（薩摩のおいも、薩摩弁で勝利宣言）。

癒し系というが自然派の村上さんと組んだのは、中川さんのセンスか、編集者のセンスか？この絶妙とも言うべき組み合わせから生まれたこの絵本での絵本作家デビュー以来、中川さんは二十年以上多作で作り続けていまや、堂々たる絵本作家だ。明るくてわかりやすい絵本には、保育士の経験や、シンガーソングライターのキャリアが生きている。クレヨンハウスでは、作詞家・新沢としひこさんとのコンビで百の歌を作曲してもらっている。どの歌も、いまも全国の幼保の現場でうたわれる名作。作曲家として大成し、絵本作家として大成してきた多才な中川さんが、次に大成するのはどの分野か。たのしみだ。次は「だじゃれ作家」か！

絵本を真ん中に一人が結ばれるとき

読みあいの向こうに灯るもの 村中李衣

むらなか りえ／児童文学者・ノートルダム清心女子大学教授

昨秋、生き難い状況にあるタイの子どものための教育支援をめざすNGOマレットファンとのご縁でシリントン青少年訓練研究所（犯罪を犯した少年たちの更生施設）での絵本の読みあいを行った。入所少年たちの社会復帰を念頭に指導を行うタイ国内でも稀有な施設である。

入所少年八十八名全員を三グループに分け、準備された五百冊の絵本をまずは自由に手に取って楽しんでもらう。その後、ペアを組んで、相手に似あう絵本を探し、その絵本を相手のために読むというのが大まかな活動の流れである。

日本国内ではこの「読みあい」を通じて、いろいろな状況にある子ども・大人、どこでも誰とでも深い交流ができていたが、果たしてタイの多感な少年たちにも同じように意味ある時間となるだろうか、内心ドキドキだった。実際、取り組み前に現場の施設職員の方からも、彼らは絵本を読むことを楽しむことはできるだろうが、それがどのように矯正教育・改善指導として意味を持つのかは疑問で

あるという声が出ていた。しかし、「誰かに喜んでもらえる時間を自分で選んだ絵本と自分の声を通して共有できた」という実感は、彼らのちいさな自信になるだろうし、自分は他者を愛し愛される存在であることを知らなければ、どんな教育プログラムを立てても、前を向いて歩いていくことに結びつかないのではないかと伝えた。伝えはしたけれど、やってみるまで不安でいっぱいだった。

さて、いよいよ少年たちのワークが始まった。ホールにマレットファンが選んだ五百冊の絵本が表紙を向けて並べられているだけで、殺風景な会場から「さあどうぞ」「好きに読んでいいんだよ」「ここにある本を見ている君の時間は、誰にも脅かされない自由な時間なんだよ」という柔らかなメッセージが聴こえてくるようだった。「では一時間の間、好きに絵本を楽しんでください」と告げられると、ワツと歓声上がり、いかつい身体つきの少年たちが、小走りで面展台上に駆け寄った。その後は、心をすっかり絵本に預けた姿で、思い思いに絵本を楽しん



イラスト／西巻茅子

でいた。何の偏見もなく強制もなく、手にとって読まれても手にとられなくても子どもたちのありのままを受け入れる五百冊の絵本たちを眺めながら、ああ、この絵本たちのような大人でありたい、子どもたちをとり巻く社会がこの絵本たちのようであつたらどんなにいいだろうと思った。

続いてペアでの読みあい。だれもが、ペアの相手の喜びそうな絵本を真剣に選んでいた。その中に、人数の関係で施設のボランティアスタッフの一人とペアを組んだ少年がいた。彼は、交流場面でそのスタッフが「おばあさんになったら、きこりになりたい」と語っていたのを覚えていて『LOVE』という写真絵本を選んだ。選んだ理由を聞かれた彼は「僕も木工を習っていて、木を扱う作業は孤独なことが多いので、きっとこんな美しい風景が好きなのではないかなと思っただ」と、はにかみながら伝えてくれた。その言葉を聴いて、そのスタッフだけでなくその場にいたグループの全員が大きくくつなずき、そして拍手を送った。誰にも何も指示されずに、彼らが他者を尊重

し拍手を送る姿に、施設職員の方々は驚かれていた。

絵本の読みあいを通して起こるちいさな心の響きあいや、ささやかな喜びは、人を大きく変えるものではない。改善すべきAの状態にあるものが絵本の力でBに変わる、というようなことではない。だからこそいいのだと思う。Aでしかない——それはどうにも動かしようがないことだとあきらめていたけれど、ひょっとしたら少しは動かせるのかもしれない、そう考えることのできた自分ってまんざら捨てたもんじゃない。そんな感覚を、

絵本で育ちあう子どもたち 徳永満理

とくなが まり／おさなご保育園理事長

私はおさなご保育園園長として在職時、子どもたちに絵本読み聞かせをしてきた。退職した今も出かけている。

四月、進級して間もない五歳児クラスで『いのちは見えるよ』（及川和男／作、長野ヒナ子／絵、岩崎書店）を読んだ。目の不自由なルミさんに赤ちゃんが生まれる。ルミさんはオムツを替えるとき、うんちを手で触る。

その場面でじゅんくんとかいくんが笑った。読後、そのことが話題になった。うんちとごっこごはがおももしろかったこと。それに対してあいこちゃんが反



絵本の読みあいは静かに認めてくれる。読みあい終了後のアンケートの中で「あたりまえのように笑いあえたことがうれしかった」と多くの少年が感想を伝

えてくれた。本物の希望は、こんなことの中にあるのではないか。

論した。「ルミさんは、目が見えないから、さわって、うんちをたしかめたんや」と。どちらも五歳児らしいし、また、性の違いも感じた。

絵本は文学と美術の総合芸術といわれるように、子どもたちは文を聞いて、絵の中のことは読み解きながら、それぞれの感性でメッセージを感じとる。読後のおしゃべりを聞くと、その感じとり方の自由さや知性に驚嘆する。子どもたちはこの読後のおしゃべりを通じて、相手に自分にならないものを感じとり、お互いを認めあい、尊重しあう関係を育んでいる

よつだ。

八月の終わりに『くれよんがおれたとき』（かさいまり／さく、北村裕花／え、くもん出版）を読んだ。さくらはゆうちゃんに真新しい白のクレヨンを買った。ゆうちゃんはちいさくなるまで使い、その上折ってしまった。さくらは許せなくて悶々とする。

友だちへの意識が高まっている五歳児さんたちだ。人ごとではないようでも真剣な面持ちだった。読後、ゆうちゃんの謝りに意見が集中した。「サンキューってえいごやし、きもち、こもってないよ

うにおもつ」という、かいくんの一言に、ことは感覚が鋭くなっているのを感じた。読後のおしゃべりからは行動が生まれ、ある時は、絵本から得た知識を実際の体験につなげ、ある時は絵本の中に登場した物や人物になってごっこ遊びになる。十月の読み聞かせの後、「せんせい、げきじょうごっこするから、みにきてや」と誘われた。年下の園児たちに劇遊びを見せるために練習してきたという。十一月、乳児さんたちも参加して、園あげの「ごっこの日」に公演するというので、もらったチケットを持って出かけた。

演目は『ボートにのって』（とよたかずひこ／作・絵、アリス館）の絵本の劇遊びだった。リょうくん（おとうさん役）とりやちゃん（うららちゃん役）がボートに見たてた平均台の上で、「ギーコン バッシャン」と漕いでいる。リょうくんが昼寝する。りやちゃんがちょうちょうの歌を歌う。そこに、さきちゃん（ちょうちょう役）が飛んで来て、「あそびまじょ」という。りやちゃんに「ごっこ」と言われ、「うれし」「ちょうちょうのふりでボートに乗った。

次にりやちゃんがかえるの歌を歌った。するとゆうくんが、補助の保育士と一緒に

に、かえるのふりをして出てきた。職員たちは驚きの声を上げた。ゆうくんは自閉症児で、これまで「ふり」をする姿を目にしたことはなかった。乳児の時からみんなと一緒に過ごしてきたゆうくんは、自分もこの劇団の一員としてこの場にいたかったのだろう。終わって、拍手喝采

絵本につどう地域の人びと 金澤和子

かなざわ かずこ／はぐはぐの樹子ども図書館館長

私が勤務する「はぐはぐの樹子ども図書館」は、横浜市南区地域子育て支援拠点「はぐはぐの樹」に併設され、絵本を中心に子育て中のママパパに寄り添う本が約三千八百冊置かれている。

駅に近い・商店街の中にある・見守りがいて安心安全・快適かつ自由に本が読めて借りられるといった利便性に富んでいるため、広場も図書館もとてもよく利用されている。書架の前では、日々、ママに抱っこされた赤ちゃんや、親や祖父と一緒の子どもたちが、読んでもらったり自分で読んだりして、いきいきと絵本の世界を楽しんでいる。

こつした地域における子ども図書館の役割は、子育て中のママパパに絵本をつなぎ、子育てを支援応援すること。具体的には、①毎月二回のおはなし会や毎日の絵本の時間を通して、絵本に親しみ、

を受ける五歳児さんたちの中にもゆうくんがいた。憧れの視線を注いでいた四歳児さんたちの拍手はひときわ大きかった。乳児の時から、絵本の時間もゆうくんは補助の保育士と一緒にいつもそこにいた。静まり返っている中で、時々大きな声を出したりもした。でもみんなは気に

楽しんでもらう。②絵本に関する相談を受け、子育てを側面からサポートする。③家庭での読み聞かせにつながるよう、蔵書や貸し出しサービスを充実させる。④「はぐはぐの樹だより」を通じて、適切な情報を提供する、などである。

このうち年間五百件におよぶ絵本相談で一番多いのは、新米ママたちからの絵本の選び方や読み方についての相談。次が「集中しない」「絵本をなめる・やぶる」子への対策。相談は子育て中のママパパのほか、プレママや祖父母、地域の支援者、さらには地域柄外国籍のママパパからもあり、その内容は多岐にわたる。

相談の中で、私の胸がズーンとなることと度々ある。それは、新米ママパパたちの、絵本とわが子への熱い思いが高じた「うるうる」エピソードだ。例えば、①絵本の言葉を話し始めたところうるうる。

することもなく絵本に熱中していた。そんな営みの中で、ゆうくんはクラスになくてはならない存在となっていたのだ。この日、ことばの世界を絵本で膨らませ、ことばでつながっていく関係の深さを感じた。

②「もっかい」「もっかい読んで」とせがまれたところうるうる。③子どもが日常生活と絵本の世界が繋がったところうるうる。④子育てに煮詰まっている自分が絵本に癒されたところうるうる。⑤自分が小さい頃の父母や園の先生との心地よい絵本体験を思い出してうるうるなど、枚挙にいとまがない。

これらの「人と絵本」をつなぐ営みのほかに、近年力を入れているのが、絵本を通じて「人と人」をつなぐ活動だ。そのひとつが、毎月最終土曜日の十時から開催の「男子会」。年々利用が増加しているパパたちがつどい、家庭や仕事、趣味などを気兼ねなく語りあう場。先輩パパが新米パパの子育て相談にのるなど、和やかな交流が続いている。その後は、恒例の「おとうさんもいっしょのおはなし会」。「男子会」に参加したパパが、読

み手として登壇し大変好評だ。パパたちの読み聞かせはアドリブもありダイナミックで、赤ちゃんまで一瞬にとりこじってしまう。

一方、絵本大好きママたちによる「絵本サポーター」活動も、おすすめ本の展示、ママ目線での絵本の紹介、おはなし会へ読み手としての参加など、実に多彩。丁寧なコメント付きの「おすすめ絵本コーナー」は大人気で、利用者の絵本選びに一役買っている。またこの活動は、思わぬ効果をもたらしている。一つ目は、ママたちが子どもを交え好きな絵本の世界で交流する自己実現の場になっていること。二つ目は、ここで得た経験や知識が、地域の推進力として次のステップ（子育てサークルや小学校などのボランティア活動など）につながっていること。三つ目は、社会参加としてママたち自身の自立した活動になっていること。このような次世代を担う若きママたちの出現は本当に頼もしく喜ばしい。

こつしたママパパたちの活動もしつかり受け止めながら、絵本を仲立ちに地域に根差した図書館作りに、心血を注いでいきたい。今年も「人と絵本」「人と人」が、限りなくつながり、結びあえますように……。



川端英子さん「野間読書推進賞」受賞記念インタビュー

地域などで長年読書推進運動に貢献し、業績をあげた個人・団体を顕彰する「野間読書推進賞」。二〇一七年度個人の部に川端英子さんが選ばれました。「のぞみ文庫」をはじめ、仙台・宮城で、読書推進のための多様な活動に携わってこられた川端さんにお話を伺いました。

★受賞おめでとうござります。

まず、「のぞみ文庫」のほじまりについて教えてください。

きっかけは一九七〇年に参加した「親子読書のつどい」。子育てに悩んでいた私は、目を輝かせて絵本に聞き入る子ども表情に驚きました。「大きいことはいいことだ」のCMが流れ、ミルク会社が「大きな赤ちゃんコンクール」を開催していた高度経済成長の真っ只中。他の子に負けまいとの一心で、育児書にかじりつき、母乳に加えて哺乳瓶の穴を広げてミルクを与えていた私は、当時の優れた絵本を全く知りませんでした。だから「競争原理では子どもは健やかに育たない。地域の子はみな自分の子だと思って育てましよう」という、つどいでのお話は衝撃的でした。

「地域での子育て、一番の実践は子ども文庫」と教わって、すぐに近所のお母さんたちとはじめたのが「のぞみ文庫」でした。下駄箱の上の本棚はすぐに大きくなり、部屋は子どもで溢れました。地域に家庭文庫がたくさん生まれ、数年後には、市内の家庭文庫を結ぶ「仙台手をつなぐ文庫の会」もできました。

★「仙台にもっと図書館をつくる会」の活動へはどうつなごったのですか。

当時、仙台市に図書館はたった一つ。文庫のために本を借りるのも遠くて大変

でした。そこで、図書館について勉強会をはじめ、思いがけず憲法について考えることになったんです。

戦争で叔父を亡くし、仙台空襲で焼け出された私は、平和憲法を大歓迎しましたが、「国民主権」や「基本的人権」のことはわかっていませんでした。でも「図書館法」を読むと、「公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」とあります。だから誰でも利用できる。さらに「図書館と同種の施設は、何人もこれを設置することができる」と、つまり家庭文庫も自由に作るができる。図書館や文庫は、憲法の精神に基づいたものだったんです。

自分が子どもの頃は、国が許可した本しか読めませんでした。私はそうしてすっかり軍国少女にされてしまいました。自由に本を読む権利を守り、広げることとは、平和な国を守るために欠かせないことだと気づいたのです。

★今後やっていきたいことはなんですか？

活動で図書館は増えましたがまだ足りません。司書の館長も増やしたいし、図書館の民営化も心配。もちろん、改憲の流れも止めなければなりません。でも、なにより身近な文庫活動を大切にしたい。

震災では本棚がすべて倒れ、本が山積みになりました。幸い子どもたちが来る前でしたが、もう文庫はできないと思えました。でも、心配した近所のお母さんたちが次々やってきて励ましてくれ、いまは隣の家につ越し、地震対策を続けています。地道な活動を続けて、一人でも、自分の頭で考えられる人を増やしたい。それが一番の願いです。

読者の声!

単行本絵本
うまれてきてくれて
ありがとう

にしもとよう／ぶん
黒井健／え
本体価格 1300円＋税



私は一人の子どもに恵まれました。息子は赤ちゃんが生まれることを楽しみにしていました。しかし、生まれてからママに会えないし、ママと遊べないし、ママとできていたことができなくなってしまう息子は、「僕は一人で住むから、ママとパパと○○ちゃんに住んでね」「僕は死ぬんだ」とすごい言葉を言っ、毎日二人（息子と私）で泣いていました。娘がもうすぐ一歳になる時、この本を二人だけでゆっくり読んでみました。息子は「これ僕のこと?」「僕だよね」と何度も読んで読んでと言ってくれるようになった。息子を抱く機会が増えて本当に感謝しています。
(埼玉県 S・H 三六歳)

単行本絵本
でんしゃがきました

三浦太郎／さく・え
本体価格 1300円＋税



一歳過ぎに本屋さんで見かけ、少しだけ読んであげたことがあります。それから一年経ち、二歳になって同じ本屋さんに行ったら、なんとまっすくこの本のコーナーに行っただけです! 「この本よんで、よんで」と何度もせがまれ、家では「この電車を食べたい、おいしそう」と言っ、楽しんでます! チーズの電車がお気に入りです。(東京都 S・S 二九歳)

復刊傑作絵本
ことばと
詩のえほん
(全3巻)

かぜにもらったゆめ

佐藤さとる／詩 村上勉／画
本体価格1400円＋税

春嵐の夜、寝つけない子どもの空想した世界が、「トントントン」と軽やかな詩で広がります。



あいうえどうぶつえん

小林純一／詩 和田誠／画
本体価格1200円＋税

あひるのあかちゃん いけまでいって……あいうえお。50音の言葉遊びと動物の姿が楽しい絵本!



へそとり ごろべえ

赤羽末吉／詩・画
本体価格1400円＋税

ごろべえが「くりんくりりん」と動物たちのおへそをとりまくり、しまいに自分のおへそまで……!



お便り、
お待ち、
しています。

「母のひろば」への「ご意見・ご感想のほか、子育てについて日々思うこと、子どもたちの活動などについて、お便りをお寄せください。送り先は下記、童心の会宛でお願いいたします。

*お便りを誌面で紹介させていただくことがあります。その際には編集部で選んだ絵本を一冊差し上げます。

あとがき

●2018年か明けの途端、森山京先生の記事が届きました。森山先生は知的な方であると共に大変優しいお人柄で、僕などもいつも励ましていただけていました。作品に登場するきつねの子やねずみの子たちは、いつでも森山先生の慈しみに満ちたまざしに包まれているように思えます。児童文学の世界から素晴らしい才能がまた失われ、残念でなりません。●

●今号は、新年にふさわしく、本を読むことの意味について、改めて考えさせてくれる記事がそろいました。好きな本を読めること、つくれることの幸せをかみしめつつ、本を手取る、携える、読みあう、贈る…、本をめぐるさまざまな場面を思い浮かべながら、本年も励んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。▲

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけます。手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



2018年1月15日発行(毎月刊)
母のひろば 第644号
定価50円(年600円/送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人: 大熊裕
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.